

未来に伝えたい

白い森おぐぐの

文化遺産

その22 熊供養塔

本町を囲む雄大な飯豊・朝日の山々。その広大な山林で営まれてきた生業（なりわい）には、その場を司るものとして「山の神」を畏れ敬う信仰が息づいています。クマなどの獲物を求め深山を駆ける狩猟もその一つです。山の神へ猟の無事と獲物が授かることを願い、山中で、あるいは里で様々な祈りと禁忌（タブー）が猟師たちのなかで実践されてきました。

そうした猟をめぐる禁忌の一つに、「ツマジロ」と呼ばれるクマに関わるものがあります。ツマジロというのは手首から先の毛や全ての爪が白いクマのことです。これは、山の神の使いとされ、獲ることが厳に戒められていました。

箱ノ口集落にある山の神神社の近くには、そのようなツマジ

ロにまつわる供養塔（石碑）が立っています。『小国郷の伝説集』（小国高等学校郷土史研究部編、1968年）では、その由緒に関し、「神の使いの熊」と題した次のような伝説を紹介しています。

その昔、箱ノ口に一人の猟師がいました。彼は、あるときクマを探しに奥山へ出かけましたが、3日経つても見つけないのできません。その日も仕方なく野宿をしようと準備を始めたそのとき、目の前の尾根をゆつくり登る立派な大グマを発見したのです。早速狙いをつけたところクマは気づき、猟師をにらみつけました。そして、両手をあげて立ちあがりました。

それを見て猟師は驚きました。というのも、そのクマはツマジロだったのです。撃つか、

撃たないか。葛藤した末、猟師は鉄砲の引き金を引いてしまいました。

弾は命中し、沢の滝つぼへとクマは落ちていきました。ところが、猟師がそこへ行ってみてもクマの姿はおろか落ちた跡さえも見当たりません。代わりにクマの形をした石が滝つぼの中に転がっていました。

猟師は、山の神がこれをクマの身代わりによこしたものと考へ、恐ろしくなつて後悔の念にかられるのと同時に、たたりを畏れ、今後一切猟はせず、クマの肉も食べないことを山の神に誓いました。さらに、この石を山の神神社の近くに埋めて「熊の神」として祀りました（※注）。ここには供養塔も建てられ、その猟師の家で代々、祭りが営まれるようになったそうです。

この石碑には建立年と思われる年号も彫られています。それによると、碑が作られたのは江戸時代末期にあたる元治元年（1864）年のようです。

山に資源の多くを依拠する暮らしのなかで育まれてきた山の



▲熊供養塔

神信仰。人びとは、その大いなる存在をあがめ、恵みに感謝しながら日々の生業を紡（つむ）いでいました。この熊供養塔は、そのように謙虚に山と向き合っていた先人たちの生き方を私たちに教えてくれるのです。

注 『広報おぐぐ』1993年7月号の「シリーズ無言の語り部たち その③」によると、この石は埋められているのではなく、猟師の子孫の家で保存されていたようです。

（教育委員会生涯学習室）



「1年間ありがとうございました」

緑のふるさと協力隊 なかの 中野 さわか 沙和華

こんにちは、緑のふるさと協力隊の中野です。

3月をもちまして、協力隊の任期が終了します。1年間大変お世話になりました。

任期中は色んなことに挑戦しました。農業、イベント運営、放課後児童教室、芸能まつり、地区行事など……全てが初めてだったので、当初は不安もありましたが皆さんいつも親切にしてくださったので、楽しく活動することができました。

特に冬は、今まで雪とは無縁の暮らしをしてきた私にとってかなり刺激的でした。雪のある生活に慣れるのには苦労しましたが、この雪を毎年乗り越えてきている小国町のかたがたは本当に強くて逞しいなと尊敬しています。

ここで得た経験と素敵な人々との出会いは私の宝です。この経験を忘れずに、今後の人生にも活かしていきたいと思います。任期終了後は一旦大阪に帰りますが、定期的に小国町には遊びにきます！その時はよろしくお願いします。

小国町のかたがた、たくさん本当にありがとうございました！！

「今日このごろ」

地域おこし協力隊 きたかぜ 北風 ひろき 裕基

今日は疲れすぎて火加減を忘れて炊飯器を吹きこぼしました。若干硬いけど残さず食べます。ガスコンロは寒すぎると片方しか点かなくなることを最近知りました。料理は久しぶりに鶏そぼろを作って食べたいです。あれは冷蔵すると煮こごりができるので、熱々のご飯で溶かして食べるのが美味しいところです。

寒い朝は蛇口の周りに氷が張っていることがあります。さすがに結露や暖房代などは気にしなくなってきました。普段は近場でも車で移動していますが、たまに歩くとスピード感が全然違って、普段気が付かないことが多いんだなと感じます。近所の家の隣にいつのまにか同じ大きさの雪山ができていました。

そろそろご飯が蒸らし終わる頃です。

